

# 私のパリ行

林 芙美子

パリと云へば華の都だ。誰も彼も出掛けた後から、今さらパリパリと得意気に、パリ行きを話したる事も氣取がし、事です。此頃は、若しと産の間に佛蘭西語が流行

るし、レヴィエーにもモンパリエとか、ロズパリなどお集たり、街を歩いても、カフエなんかは、モナシの、ムーランルージュだの、全くパリは日本に近き感じだ。

最初、パリ行きの計画を立てる前は、私は4ベツトヤ蒙古方面に行きたくて、三週間も水と考へて暮らした。

去年、私はハルビンまで行って事があつたので、あの地方の汽藻とした長閑さに、ほとほと酔は下り、時間と金がお小は、楽地へは

4月

1936 雑誌時勢

いつて見たら仕様がなかつた。

女性で單身蒙古から4ベツトもあつたのは、英國の若婦人記者が一人で、此人はかなり大膽なフランスを立て、半年近くも南地を歩いた。おとと古小車だ。知れぬと矢急して、イヤッが、大夏面白見聞記が出て飛ぶやうに賣れ、と古小車である。

日本にも流行ばかりに記事をつひやす新聞雑誌が、少しばかり次頁を止して、こんな奇画を立たすよつほど面白くせう。